

[2021年度 入選]

近世・近代における「花名所」の変化 — 京都・大阪を例として —

奥田 美帆

第1章 はじめに

- (1) 研究の目的と背景
- (2) 研究の方法

第2章 近世の名所観と花名所

第3章 京都

- (1) 京都の案内記
- (2) 京都の花名所
 - i) 桜 ii) 梅 iii) 桃

第4章 大阪

- (1) 大阪の案内記
- (2) 大阪の花名所
 - i) 桜 ii) 梅 iii) 桃

第5章 花名所の評価の時代変化

- (1) 桜、梅、桃の名所の特徴
- (2) 京都と大阪の花名所

第6章 まとめ

第1章 はじめに

(1) 研究の目的と背景

JTBが毎年発行している「旅行年報」では、日本人の旅行に対する意識の調査結果をまとめている。この中で、「行ってみたい旅行のタイプ」として、自然観光、温泉旅行など37のタイプ（2021年版）が分類されており、「花の名所巡り：桜やハーブなどの花の名所を訪ねる旅行」というタイプは、2021年版では全体では20位と中位であるが、60代、70代の女性では6位、3位と人気のある旅行タイプとなっている。このような傾向は毎年ほぼ一定である。一方で、「旅行タイプ別行ってみたい旅行先」の調査も毎年行われており、花の名所巡りで行ってみたい旅行先の都道府県を10年前と比較すると、登場する都道府県が異なっている（図1）。このことから、花の名所は一定の場所が継続的に評価されていない可能性がある。

| 2019年（回答数：191） | | | 2009年（回答数：278） | | |
|----------------|-------------|-------|----------------|-----|-------|
| 1位 | 北海道 | 20.4% | 1位 | 北海道 | 16.9% |
| 2位 | 青森県 | 9.4% | 2位 | 京都府 | 16.2% |
| 3位 | 長崎県 | 7.3% | 3位 | 青森県 | 12.2% |
| 4位 | 茨城県、栃木県、福島県 | 3.1% | 4位 | 奈良県 | 6.8% |
| | | | 5位 | 長野県 | 4.0% |

図1 旅行タイプ別行ってみたい旅行先
日本交通公社(2019)『旅行年報2019』より

花の名所の歴史的な変化については、以前、大阪市天王寺区四天王寺に位置する浄土宗の寺院、壽法寺を対象に紅葉の名所としての評価の変化について考察を行った。壽法寺は紅葉寺という別名を持っている。その名の通り、近世には『浪花百景』に紅葉を楽しむ人々が浮世絵に描かれ、1920年頃までは紅葉の名所として知られていた。しかし、現在では境内に数本の若モミジが残るのみである。壽法寺が紅葉の名所でなくなった経緯を調べると、寺の傍にあった毘沙門池という池が埋め立てられたことにもなって紅葉への評価も薄れ、その結果名所として維持されなかったことが明らかになった。壽法寺という一つの名所に注目し、そこが紅葉の名所としてどのような変化をたどっていったのかを見ると、周囲の開発圧という背景も考慮する必要はあるが、場所に対する強いこだわりがあったとは考えにくい。花や紅葉を見る名所（一括して「花名所」とする）は、時代を越えて一定の場所が評価される傾向にあるのか、あるいは、花名所の見られ方は変化し、場所は固定化されないのだろうか。

(2) 研究の方法

花名所は時代によって変わっていくものなのかという問いを明らかにするために、近世と近代の名所案内から花に関する記述がある名所を抜き出し、そこでの花の紹介のされ方を比較する。そこから、花名所にどのような変化があったのかについて考察を行う。一言で花といっても四季折々に咲く多様な花がある中で、「やはり名所の花としては、梅・桜・桃といった春咲く花が一般的で、花見が春の季節と結びついた行楽であることを窺わせる」（小野，1991, p.3）ことから、本論文では桜、梅、桃の3種類を考察の対象とした。対象地域

として、近世の名所案内が多く刊行された江戸、京都、大坂が考えられるが、2章でみるように近世の江戸の名所観は京都、大坂とは異なっていると考えられることから、本論文では京都と大阪の2ヶ所を選択した。

京都と大阪の案内記をそれぞれ近世と近代で比較することによって、どのような時代変化があるのか、桜、梅、桃でその変化の仕方に違いはあるのかを明らかにする。また、京都と大阪の花名所の比較を行うことで、人々は花に対してどのような価値観を共有していて、どのような部分で違いが現われるのかも明らかにする。

第2章 近世の名所観と花名所

近世の京都に「花名所」という見方はあったのか、花をどのように評価しているのかを明らかにするために、京都府立総合資料館(2006)がまとめた「江戸時代の京都案内記」の一覧から、名所の案内が中心となる案内記について、そこでの花に関する記述を概観した(表1)。

当時「御室清水」(表1の『雍州府誌』、『堀川之水』でふれられている)と並び称されていた桜の名所である「御室仁和寺」と「清水寺」を例に見ても、京都の案内記23冊の内、桜に関する記述があったものはそれぞれ9冊、6冊と多くなかった。その記述も簡潔なものが多く、桜が多いことはそれほど重要な意味を持っていない。また、仁和寺のような大規模な桜の名所に関する記述はないものの、「名樹」や「名木」といった項目で、各所の名のある樹を列記する形で紹介する案内記は4冊あり、「鶯宿梅」のように名前の付いた花木が紹介されていた。以上のことから、近世の案内記において名所にある花はさほど注目されておらず、名前の付いた単木が見るべき花として評価されていたということが伺える。

上杉(2004)は、近世の人々の名所観に関し、1701年刊行の撰津の名所を記した『撰陽群談』を分析し、図2のような名所があったと整理している。「歌名所」は過去に詠まれた和歌や歌学書などに基づく名所(いわゆるナドコロ)、「俗名所」は和歌とは関係ない名

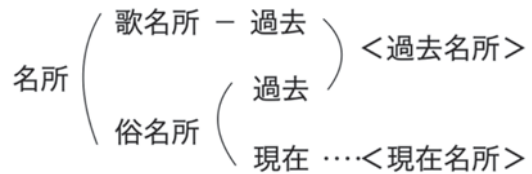


図2 名所観の構成(上杉, 2004による)

所で、多くは建立や事件といった過去の由来に基づく「過去名所」であるが、現在の状況が基になっている「現在名所」も含まれる。そして上杉(2004)は、江戸の名所案内記では現在名所が中心であるが、17世紀後半までの京都の名所案内記は過去名所が中心であるという違いがあり、大坂では京都の案内記に沿って過去名所への意識が強いことを指摘している。

表1でみた近世京都の案内記では、花の存在よりも、名前の付いた単木が見るべき花として評価される傾向であった。これは、中世以前からの、和歌に詠み込まれる歌枕としての名所(ナドコロ)や、その花にまつわる言い伝えを基にした「過去名所」が中心に取り上げられたためだと考えられる。仁和寺の桜に関する個別の記述をみると、『京城勝覧』では現在名所として記述され、『都名所図会』では過去名所と現在名所の記述が混在している。

【表1】 江戸期に出版された京都に関する主な名所案内とそこでの花の記述

| タイトル | 著・編者 | 成立年 | 仁和寺の桜の記述 | 清水寺の桜の記述 | 「名木」「名樹」に関する記述 | 引用元 |
|-------------|--------|---------------------------|---|--|---|----------|
| 京童/京童跡追 | 中川喜雲 | 1658 (明暦4) /1667 (寛文7) | なし | なし | | 新修京都叢書1 |
| 洛陽名所集 | 山本泰順 | 1658 (万治1) | なし | [清水寺] ことに春も三月の頃になればにや。猶しも。桜木のほとりせばしとちうちかこみ。花さき一人にかほりて。ささながら雲とみれば。雪ははやのこらましと思ひ。 | | 新修京都叢書11 |
| 扶桑京華志 | 松野元敬 | 1665 (寛文5) | なし | なし | 卷三 「草木」 千本櫻 西行櫻 小 棺掛櫻 墨染櫻 鶯宿梅 霊 碁盤梅 西行櫻 認来梅 | 新修京都叢書22 |
| 京師巡覧集 | 丈愚 | 1679 (延宝7) | なし | なし | | 新修京都叢書11 |
| 菟蓐花赴 | 北村季吟 | 1684 (貞享1) | なし | なし | | 新修京都叢書12 |
| 京羽二重/京羽二重織留 | 水運堂孤松子 | 1685 (貞享2) /1689 (元禄2) | なし | なし | 卷一 「名木」 西行櫻, 墨染桜, 小 督桜, 未開紅 鶯宿梅, その他松な どとあり/織留: 卷二 「名樹」 千本 櫻 西行梅 鶯宿梅 | 新修京都叢書2 |
| 雍州府誌 | 黒川道祐 | 1686 (貞享3) | [仁和寺] 近世寺中多植桜 依之於今御 室清水為一隻 然清水東方而和暖故花 之開也速矣 御室西方而寒冷故花之 也遲矣 自為洛人一春前後之観 | [清水寺] 凡当山四時風景非筆舌之所 及故遊人常絡繹不絕跡特桜花之爛漫 也瀑之清冷也是洛陽之一奇觀而世人 之口実也 | | 新修京都叢書10 |
| 近畿歴覽記 | 黒川道祐 | 貞享期頃か | [仁和寺] 亀山院吉野山ヲ櫻シ、蔵 王権現ヲ勧請ス、植ル所ノ千本ノ桜 ハ、今猶殘レリ | 清水寺の記述なし | | 新修京都叢書12 |
| 名所都鳥 | | 1690 (元禄3) | 仁和寺の記述なし | 清水寺の記述なし | 卷五 「名木之部」 鶯宿梅, 未開紅 梅, 小督桜, 千本桜, 西行櫻, 墨染桜, 西行櫻, その他松あり | 新修京都叢書5 |
| 堀川之水 | 富尾似船 | 1694 (元禄7) | [仁和寺] 此の寺の花、東山よりはさ かり遅し、清水のちり過る頃、御室 の桜最中なり、世の人清水御室とい ひて左右をあらそふ、花の名所、家々 の幕つくくし、幸若が扇拍子大柏が舌 根もをよびがたくや | [清水] 歌枕ニ 月の色もあらしの音 も清水の瀧に瀧そふ花のしらなみ | 卷一 春部 梅花、花、桜の頂 花 今洛陽に花の名高き所々として、 東山八坂郷祇園、清水、東山吉水院(知 恩院)、仁和寺、水無瀬、平等院など を紹介 | 新修京都叢書5 |
| 京城勝覽 | 貝原益軒 | 1706 (宝永3) | [仁和寺] 春は此御境内の奥に八重 ざくら多し洛中洛外にて第一とす吉 野の山櫻に對すべし毎年花のさかり 十餘日の間は見る人多くして日々に 群集せり酒食をたづさへ幕をはりて 遊宴をなす者多し高塔あり花をめぐ らん人は花の始中終三度ゆきて見て し。木多きゆへさかり久し | [地主権現] 観音堂のうしろ高き所に 有。桜あり | | 新修京都叢書12 |

| | | | | | | | |
|---------------------|------|---------------------------|---|----|----|----|--------------------------------|
| 京内まわり | 守拙斎 | 1708 (宝永5) | なし | なし | なし | なし | 新修京都叢書5 |
| 山城名勝志 | 大島武好 | 1711 (正徳1) | なし | なし | なし | なし | 新修京都叢書13, 14 |
| 山州名跡志 | 白慧 | 1711 (正徳1) | なし | なし | なし | なし | 新修京都叢書15 |
| 都名所車 | | 1714 (正徳4) | [仁和寺] 花の比はよしのの山を爰にうつし八重ざくからおほく咲みだれ其外さくらの諸木有て花の都の第一とす | | | | 新修京都叢書5 |
| 山城名所寺社物語 | | 享保年間 | [仁和寺] 花のころはよしのの山を爰にうつし八重ざくからおほく咲みだれ其外さくらの諸木ありて花の都の第一とす | | | | 新修京都叢書22 |
| 山城名跡巡行志 | 浄慧 | 1754 (宝暦4) | なし | なし | なし | なし | 新修京都叢書22 |
| 都名所図会 / 拾遺 都名所図会 | 秋里籬島 | 1780 (安永9) /1787 (天明7) | [仁和寺] 当山は佳境にして、むかしより桜多し、山嶽近ければつねにあらしはげしく、枝葉もまれて樹高からず、屈曲ためたるが如し、弥生の御影向は猶更、花の盛には都部の貴賤春の錦を争ひ、暮引はへ、鹿松が酒にふし、李白が恨は長繩を以て西飛の白日を繋ぐ事を得んとは、春色の風客花にめでて日ををしむと論なり | | | | 国際日本文化センター ター |
| 都花月名所 | 秋里籬島 | 1793 (寛政5) | [仁和寺] 当山は洛北の名区にして昔より桜多し。山嶽近ければ常にあらはげしく枝葉もまれて屈曲ためたるがごとし。数千株の花盛には都下の貴賤春の錦をあらそひ。花の陰に暮打はへ。清香を袖にたたへ。…(その後も記述内容多い) | | | | 新修京都叢書5 |
| 京都順覧記 | 池田東籬 | 1831 (天保2) | [仁和寺] 又御寺内桜樹多く名所なり | なし | | | 近世風俗・地誌叢書 3巻 (慶應再刻版を 掲載) |

タイトル・編者等・成立年は江戸時代の京都案内記、京都府総合資料館だより No.143 (2006) を元に作成

第3章 京都

(1) 京都の案内記

近世には庶民による旅が一般的になり、案内記が数多く出版されるようになる。では近世において、どのような場所が京都の花名所であったのかを、案内記の中で発行部数が多いとされ¹⁾、他の案内記と比べて花に関する記述が多い貝原益軒の『京城勝覧』(1706)、秋里籬島の『都名所図会』(1780)²⁾及び『拾遺都名所図会』(1787)の3冊から考察する。両者の刊行時期は80年ほどの隔りがあり、その間の変化をみることも可能である。今回考察をするにあたって、『都名所図会』とその続編である『拾遺都名所図会』は2冊で1組として扱っている。上記3冊に加え、『都名所図会』『拾遺都名所図会』と同じく秋里籬島によって刊行された『都花月名所』(1793)を秋里の花名所観を知るための補足的な資料として用いる。また、近世と近代で花の見られ方に変化があるのかを調べるために、近代の案内記として『日本案内記』全8巻の内の「近畿篇上」(1932)を用いる。

まずは、比較に使用した案内記の説明をしておく。『京城勝覧』は1706年に貝原益軒によって刊行された京都観光におけるモデルコースを示した案内記である。貝原益軒の紀行文の特徴として、「一読してわかるように多数の文献を踏まえて紀行文を記していること、さらに科学者の視点から訪れた土地に関する俗説等を客観的に考証していることなどから、益軒紀行に記された情報が、読者である観光客にとって信頼できる情報として認識」(溝口, 2001, p.374) されていたことがあげられる。貝原益軒は京都の出身ではないが、「若い時に藩の計らいにより六年間の京都遊学を果たし、以後も、一年前後の長期滞在を五回ほど経験、短期滞在も合わせると、その訪問回数は生涯二十四度にのぼった」(金, 2010, p.83) ことから、京都への造詣の深さを伺うことができる。

次に、『都名所図会』は1780年に刊行された、京都の名所を紹介する図会である。1787年刊行の『拾遺都名所図会』はその続編にあたる。両名所図会の著者である秋里籬島は、「自らが現地に赴いて見聞し、旧記や寺社縁起等との情報の照合を行なっている」(長谷川, 2012, p.23) ことから、実証主義的な姿勢であったことが伺える。『都名所図会』の特徴は、商人であった秋里籬島が「売る事を念頭に置いた商業ベースとして、これまでの地誌本には無かった実証的で思想的な図会を目玉」(長谷川, 2012, p.24) に据えているという点である。同じく秋里籬島によって1793年に刊行された『都花月名所』では、京都の評価されるべき自然景観が項目ごとに一冊にまとめられている。項目は全部で22項目あり、花、月、雪、丹楓、梅、桃、款冬、藤、燕子花、蓮、萩、松、石、瀧、清水、郭公、鶉、水鳥、鹿、螢、虫、河鹿から成っている。この本の特徴は、「場所の由来を語る、花や月の名所を紹介する、という目的をもった『都花月名所』であるが、重要な構成要素は、和歌や俳諧、古典であるといってもよい」(郡, 2007, p.22) と言われるほど、和歌や古典が多く紹介されている点である。

最後に、『日本案内記』は鉄道省が旅客促進を目的に刊行した旅行案内書である。約10年の歳月をかけて完成された『日本案内記』は、「全8巻、「東北篇」「関東篇」「中部篇」「近畿篇上・下」「中国四国篇」「九州篇」「北海道篇」からなる極めて大部のガイドブックであり、これに匹敵する国内のガイドブックは現在まで出ていないといっても過言ではない」(岩佐, 2001, p.20)。つまり、「『日本案内記』は旅行案内書の決定版・名著ともいえるべきもの」(山本, 2010, p.132) だと言える。その内容は、「東京帝国大学の黒板勝美(国史)、山形直方(地理)両氏に指導助言を仰いで作成されたこともあり、かなりアカデミックな仕上がりになって

いる」(岩佐, 2001, p.20)。このことから、その記述内容の正確性と客観性が伺える。

以上のことから、いずれの案内記も客観的事実に基づいて書かれ、記載内容の比較を行うことが可能であると考ええる。

(2) 京都の花名所

i) 桜

まずは、桜に関する比較を行う。それぞれの案内記の中で桜に関する記述は、『京城勝覧』17例、『都名所図会』『拾遺都名所図会』合わせて32例、『日本案内記』20例であった。それらをまとめたものが【表2】である。表の作成にあたって、桜に関する記述があっても「かつて桜の名所であった」のような紹介文で、案内記が書かれたときに名所とは言えない状態であった場所は省略している。また、本文での紹介はないものの、図会の中の注釈に桜の名前が明記されているものに関しては、見るべき桜があるとして1例にカウントしている。表では、桜の多さが評価されている場所を“多”、単木の桜が評価されている場所を“単”、謂れのある桜で単木でないものを“謂”、桜が有るという記述の場所を“有”で示している。また、単木の桜の中でも〇〇桜と名前がついているものは、“単(〇〇桜)”のように表記している。“謂”は、『都名所図会』を例として「亀山院吉野の桜をうつし給ひし所とぞ」という嵐山や、「秀吉公花見遊宴の地なり」という醍醐寺など、桜の多さではなくかつてその場で行われた事実などに関する記述がされている場所をカウントしている。

【表2】 京都の案内記における桜の記述

| 刊行年 | 1706年 | 1780年・1787年 | 1932年 |
|----------|-------------|------------------|---------|
| 場所 | 京城勝覧 | 都名所図会 拾遺都名所図会 | 日本案内記 |
| 仁和寺 | 多 | 多 | 多 |
| 嵐山 | 多 | 謂 | 多 |
| 醍醐寺 | 多 | 謂 | 謂 |
| 興聖寺 | 多 | 有 | 多 |
| 祇園(圓山公園) | 有 | 有 | 多 |
| 月輪寺 | 単(時雨桜) | 単(時雨桜) | 多 |
| 法輪寺 | 単(西行桜) | 単(西行桜) | 多 |
| 勝持寺 | 単(西行桜) | 単(西行桜) | 単(西行桜) |
| 知恩院 | 多 | 有 | |
| 清水寺 | 有 | 多 | |
| 高台寺 | 多, 単(ウバサクラ) | 有, 単(姥桜) | |
| 鞍馬寺 | 多 | 単(うず桜) | |
| 車折神社 | | 謂 | 有 |
| 双林寺 | | 単(西行桜) | 単(西行桜) |
| 京都御所 | | 単(左近桜) | 単(左近の桜) |
| 善峯寺 | 多 | | |
| 聖護院 | 多 | | |
| 金龍寺 | 多 | | |

| | | | |
|------------|----|----------|----|
| 安井眞性寺/観勝寺 | 有 | | |
| 庚申堂/善光院 | 有 | | |
| 長岡天神 | | 多 | |
| 粟田神明宮 | | 多 | |
| 岩屋一鳥居 | | 多 | |
| 日山神明宮 | | 多 | |
| 円通寺 | | 多 | |
| 大谷 | | 多 | |
| 方広寺 | | 有 | |
| 本願寺 | | 有 | |
| 墨染寺 | | 単(墨染桜) | |
| 清凉寺 | | 単(棺掛桜) | |
| 東漸寺 | | 単(泰山府君) | |
| 石清水八幡宮 | | 単(影向桜) | |
| 西行寺 | | 単(西行桜) | |
| 寂光院 | | 単(みぎわの桜) | |
| 間臥庵 | | 単(曙桜) | |
| 小督桜 | | 単(小督桜) | |
| 花瀬峠 | | 単 | |
| 赤山/修学寺 | | | 多 |
| 平野 | | | 多 |
| 北吉野/神童寺 | | | 多 |
| 白河天皇成菩提院御陵 | | | 多 |
| 牛尾観音法嚴寺 | | | 多 |
| 賀茂別雷神社 | | | 多 |
| 大覚寺 | | | 有 |
| 記念動物園 | | | 有 |
| 廣澤池 | | | 有 |
| 合計 | 17 | 32 | 20 |

まず、全体としての考察を行う。全46例の内、全ての案内記で取り上げられている場所は8例、2つの案内記で取り上げられている場所は7例であった。残りの31例はいずれかの案内記1つでのみの紹介であった。これは、全体の約75%にあたる。このことから、京都の桜名所として定番化されたいくつかの場所は名所として評価され続けているが、それ以外の場所に関しては評価が流動的であることがわかる。それぞれの案内記で紹介された桜名所の総数にそこまで大差がないことから、桜の名所は失われているのではなく、その時々で移り変わっているのだと考えられる。

次に、近世の案内記である『京城勝覧』と『都名所図会』『拾遺都名所図会』の比較を行う。両案内記あわせて34例の名所が紹介されており、共通して取り上げられているのは12例であった。残りの22例は一方の案内記にしか登場しなかった。

近世に桜の名所として挙げられている場所は大きく分けて、桜の数が多い場所、謂れの桜がある場所の2種類に分かれている。まずは、桜の数の多さが評価されている場所

について見ていく。【表2】の“多”の部分である。『京城勝覧』では17例中10例が、『都名所図会』『拾遺都名所図会』では、32例中8例が桜の多さを評価していた。割合からみると、貝原益軒は数の多さを花名所の条件として重視していたのに対し、秋里籬島はあまり数の多さを名所の評価基準としていないことがわかる。両案内記に共通して数の多さを評価されていたのは、「仁和寺」のみであった。当時の仁和寺の境内にいかに桜が多かったかは、『都名所図会』の図会に描かれた桜の本数からも読み取ることができる。『都名所図会』『拾遺都名所図会』において、桜の名所として紹介されていた場所の図会に描かれた桜の本数を全て数えたところ、仁和寺の図会には90本もの桜が描かれていた。この90本という本数は、2番目に桜の描きこみが多かった嵐山の42本と比較しても2倍以上となっている。また、その大量の桜の下で幕を張ってお花見を行う多くの人々も描かれていることから、近世の仁和寺が桜の名所として大規模であったことがわかる(図3)。

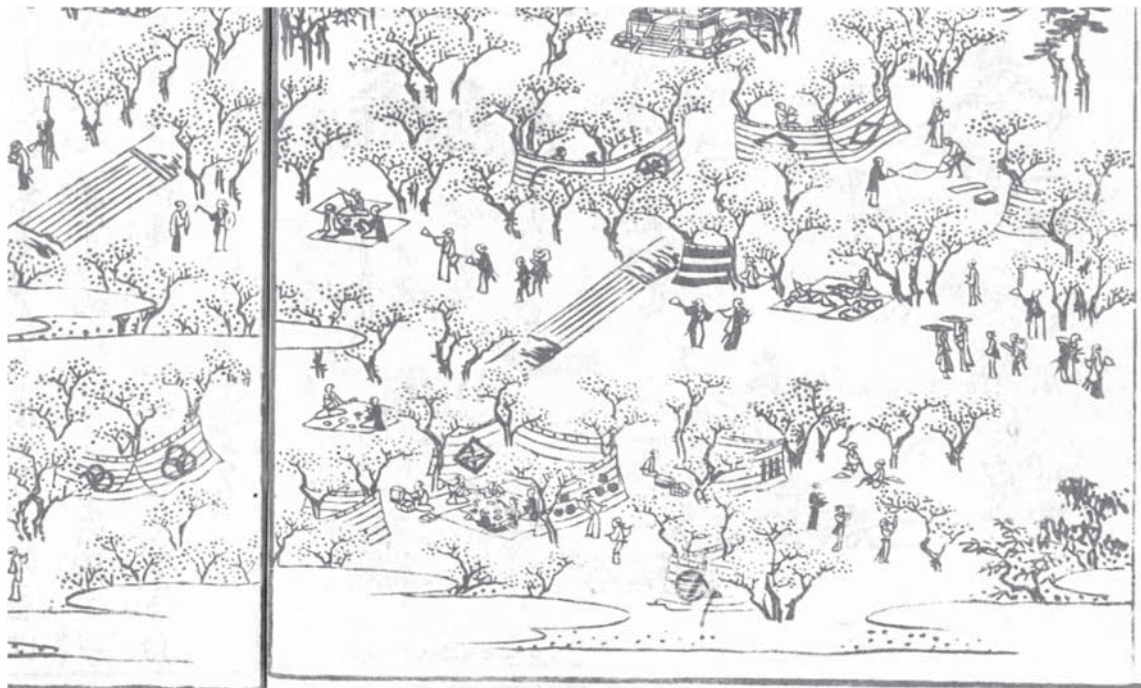


図3 御室仁和寺の図会(一部) (『都名所図会巻之六』天明6年再板)
国会図書館デジタルコレクションより

次に、謂れのある桜が評価されている場所について見ていく。【表2】の“謂”及び“単(○桜)”の部分である。“単(○桜)”は「池の傍にあり、嵯峨天皇崩御のとき、御遺詔により御棺を此桜にかけしとぞ」という清凉寺の棺掛桜のように、それぞれの単木が謂れを持っているため、謂れのある桜としてカウントしている。『京城勝覧』では17例中4例、『都名所図会』『拾遺都名所図会』では32例中18例が謂れのある桜を評価していた。このことから、桜の数を名所の評価基準としていた貝原益軒に対し、秋里籬島は謂れの有無を名所の評価基準として重視していたことがわかる。両案内記において共通して謂れのある桜が評価されていたのは、「勝持寺」の西行桜、「月輪寺」の時雨桜、「法輪寺」の西行桜、「高台寺」の姥桜の4例であり、いずれも名前の付いた単木であった。

また、両案内記に共通して紹介されている12例の内3例においては、『京城勝覧』では桜の多さが評価され、『都名所図会』『拾遺都名所図会』では謂れを評価されている。このこと

から、同じ場所の桜に対しても多様な視点からの評価がなされていたことがわかる。

以上のことから、近世の桜名所では「数の多さ」、「謂れ」という2つの基準が同程度に評価されていたことがわかる。では、それに対して近代の桜名所はどのようなものであったかを『日本案内記』における桜の記述から考察する。『日本案内記』の桜名所20例中、数の多さを評価しているのが12例、謂れを評価しているのが4例であった。謂れが評価されている4例の内、『日本案内記』のみで紹介されている例はないことから、『日本案内記』では100年以上前から謂れを評価されている桜のみ、謂れのある桜として紹介していることがわかる。また、『日本案内記』でのみ紹介されている桜名所は全て“多”もしくは“有”である点、近世の案内記2冊では謂れを評価されていたにも関わらず『日本案内記』では数の多さが評価されているものが2例ある点から、『日本案内記』が刊行された近代では、「数の多さ」という評価基準が桜名所において重要視されていることがわかる。

ii) 梅

次に、梅の名所の比較を行う。それぞれの案内記の中で梅に関する記述は、『京城勝覧』5例、『都名所図会』『拾遺都名所図会』合わせて9例、『日本案内記』2例であった。4つの案内記をすべて合わせると、梅が紹介されている名所は14例あった。それらをまとめたものが【表3】である。取り上げられ方の特徴として、『日本案内記』の紹介数が他と比べて極めて少なくなっていた。

【表3】 京都の案内記における梅の記述

| 刊行年 | 1706年 | 1780年・1787年 | 1932年 |
|--------|-----------|------------------|-------|
| 場所 | 京城勝覧 | 都名所図会 拾遺都名所図会 | 日本案内記 |
| 誓願寺 | 単(未開紅) | 単(未開紅) | |
| 西念寺 | 単(とめこかし梅) | 単(とめこかしの梅) | |
| 鞍馬 | 多 | | |
| 日野 | 多 | | |
| 梅ヶ畑 | 多 | | |
| 梅溪 | | 多 | |
| 安楽寿院 | | 単(碁盤梅) | |
| 相国寺 | | 単(鶯宿梅) | |
| 大泉寺 | | 単(数珠掛梅) | |
| 菅大臣社 | | 単(飛梅) | |
| 誠心院 | | 単(軒端梅) | |
| 永観堂 | | 単(悲田梅) | |
| 青谷梅林 | | | 多 |
| 賀茂別雷神社 | | | 多 |
| 合計 | 5 | 9 | 2 |

まず全体についてであるが、桜と違い全ての案内記で取り上げられている場所は1例もなかった。また2つの案内記で取り上げられている場所も2例のみであった。1つの案内記

でのみ紹介されている場所は12例であり、これは全体の約85%にのぼる。つまり、梅の名所は桜と同じくその大部分が流動的であることがわかる。また、変化する中で近代の『日本案内記』では梅林という新たな梅観賞の形式が現れている。

次に、近世の案内記である『京城勝覧』と『都名所図会』『拾遺都名所図会』の比較を行う。両案内記あわせて12例の名所が紹介されており、共通して取り上げられているのは2例であった。この2例は「誓願寺」の未開紅、「西念寺」のとめこかし梅と、どちらも単木の梅を評価したものであった。しかし、どちらか一方の案内記でしか紹介されていない梅名所を見ると、貝原益軒は3例全てが数を評価、秋里籬島は7例中6例が謂れを評価しており、桜と同じくそれぞれの著者の名所観が明確に表れる結果となった。特に、秋里籬島は全9例中8例が「碁盤梅」や「鶯宿梅」などといったように単木で名のついた梅を取り上げ、謂れを評価する割合が非常に高くなっている。このことから、著者である秋里籬島は特筆すべき梅の条件として、数の多さよりもエピソードを持つものを優先したことが伺える。この名所観は、同じく秋里籬島が記した『都花月名所』からも見るができる。『都花月名所』の梅の項目では、全部で23ヶ所の名所が紹介されており、そのうち「○○梅」のように名前がついているものは17例に及ぶ。『都名所図会』では図会の中の注釈で名前が紹介されるに留まっていた「とめこかし梅」や「悲田梅」も、それぞれ1つの項目として記載されている。また、紹介する順番においても名前がついている梅の17例を先に述べ、その後梅が多い場所を6例並べると紹介の仕方をしている。このことから、秋里籬島が梅の数の多い場所よりも、名前がついている単木の梅を優先的に紹介しようとしていたことが伺える。『京城勝覧』においても、名前のついた梅は「未開紅」と「とめこかし梅」の2例が紹介されているが、5例中の2例であるので、いかに『都名所図会』『拾遺都名所図会』が紹介する単木の梅が多いかがわかる。

両案内記に共通して取り上げられていること、第2章でみた近世の他の案内記にも名樹や名木という項目があり、そこで「鶯宿梅」などの単木の梅が紹介されていることから、近世においては謂れのある梅は単木であっても見るべきものであるという評価が得られていたことがわかる。一方で、梅の多さを評価している場所も両案内記あわせて4例ある。このことから、近世における京都の梅名所は謂れのある梅に比重は偏っているものの、桜と同じく「数の多さ」、「謂れ」の2つの評価基準を有していたことがわかる。

では、近代の京都ではどのような場所が梅の名所とされていたのであろうか。『日本案内記』で取り上げられている梅名所は2例と少なく、その両方が数を評価するものであった。このことから、近世において梅は桜以上に数の多さが重要視されるようになったことがわかる。

iii) 桃

次に、桃の名所の比較を行う。それぞれの案内記の中で桃に関する記述は、『京城勝覧』1例、『都名所図会』『拾遺都名所図会』合わせて2例、『日本案内記』0例であった。それらをまとめたものが【表4】である。

【表4】 京都の案内記における桃の記述

| 刊行年 | 1706年 | 1780年・1787年 | 1932年 |
|--------|-------|------------------|-------|
| 場所 | 京城勝覧 | 都名所図絵 拾遺都名所図会 | 日本案内記 |
| 城山(伏見) | 多 | 多 | |
| 蜘蛛塚 | | 多 | |
| 合計 | 1 | 2 | 0 |

全ての案内記を合わせても、桃が紹介されている名所は2例にとどまった。『日本案内記』では桃の名所が紹介されていなかったため、3つの年代全てで紹介されている例は1つも見られない。2つの年代で紹介されているものも、『京城勝覧』と『都名所図会』で紹介されていた「城山(伏見)」の1例のみであった。桃の中では唯一約100年間名所としての評価が続いた「城山(伏見)」は、伏見桃山として現在も地名にかつての名残が残っている。

いずれの案内記においても桃の名所は非常に少ないことから、桃は花の名所としてあまり評価されていないことがわかる。また、桜や梅と違い単木で評価されている桃がないことから、桃は評価されるとしても「数の多さ」でのみ評価されているということがわかる。このことは、『都花月名所』の記述からもみることができる。『都花月名所』では4例桃の名所が挙げられており、その全てが桃の数の多さを評価したものであった。桜や梅で謂れを花名所の重要な要素だとしていた秋里籬島においても、謂れのある桃を取り上げることはなかったのである。これは、桃が観賞用ではなく商品作物として栽培されるものであったことが原因であると考えられる。「商品作物は数ヶ村にまたがって栽培されることが多く、その規模の大きさは村里を含む風景に人々の目を向けさせ、また、それまで観賞の対象とは考えられなかった種類の花や紅葉を景物として、人々の行楽の対象をひろげた」(小野, 1991, p.16) のである。つまり、取り上げられている桃の名所は観賞用に桃を植えて名所となったのではなく、商品作物用の桃が大量に植わっている様子が人を惹きつけて名所になったのだと考えられる。商品作物用の桃を1本のみ植えるということは考えづらく、単木の桃が評価されている場所がないのもこのせいであろう。

第4章 大阪

(1)大阪の案内記

近世において、どのような場所が大阪の花名所であったのかを、『都名所図会』の作者である秋里籬島の『撰津名所図会』(全12巻の内の1巻から6巻)³⁾と暁鐘成の『浪華の賑ひ』の2冊から考察する。京都との比較には、『京城勝覧』と同時期の案内記が好ましいが適当なものがなく⁴⁾、『撰津名所図会』と比較可能な数の花名所があげられ、広く流布したものとして『浪華の賑ひ』をとりあげた。『撰津名所図会』の後に刊行されたものであるが、刊行時期は60年ほどの間隔があることから、この間の変化を見ることも可能である。

また、近世と近代で花の見られ方に変化があるのかを調べるために、近代の案内記として『日本案内記』全8巻の内の「近畿篇下」を用いる。

まずは、比較に使用した案内記の説明をしておく。『撰津名所図会』は、1798年に秋里籬島によって刊行された案内記である。秋里籬島が実証主義的に案内記を記していたことは、

前述の京都編、『都名所図会』『拾遺都名所図会』の説明で述べた通りである。次に、『浪華の賑ひ』は1855年に暁鐘成によって刊行された案内記である。暁鐘成は、幕末の頃の大坂でもっとも精力的に著述や出版活動を行った人であり、地誌や随筆をはじめとして、演劇書、教訓書、実用書から戯作の滑稽本、噺本など専門的なものから娯楽本まで多彩なものに関わり、幅広い読者を得たという（肥田，2018, p.1）。『日本案内記』の「近畿篇下」は、1933年に鉄道省から刊行された案内記である。『日本案内記』の内容が客観性をもつものだという点も、京都の章で述べた通りである。

(2) 大阪の花名所

i) 桜

最初に、桜に関する比較を行う。それぞれの案内記の中で桜に関する記述は、『摂津名所図会』15例、『浪華の賑ひ』15例、『日本案内記』6例であった。それらをまとめたのが

【表5】である。3つの案内記をすべて合わせると、桜が紹介されている場所は29例あった。

【表5】 大阪の案内記における桜の記述

| 刊行年 | 1798年 | 1855年 | 1933年 |
|---------|--------|-------|--------|
| 場所 | 摂津名所図会 | 浪華の賑ひ | 日本案内記 |
| 桜野宮 | 多 | 多 | |
| 九昌院建国寺 | 多 | 有 | |
| 安居天神 | 有 | 有 | |
| 月江寺 | 有 | 有 | |
| 隆専寺 | 単 | 多 | |
| 菩提寺 | 単 | 単 | |
| 井保桜 | 単(井保桜) | | 単(井保桜) |
| 広教寺 | 多 | | |
| 潮見桜 | 多 | | |
| 洞岩寺 | 有 | | |
| 勝鬘寺 | 単 | | |
| 寂光寺普賢院 | 単(西行桜) | | |
| 知足院勝尾寺 | 単(幸寿桜) | | |
| 金竜寺紫雲院 | 単(能因桜) | | |
| 浄土寺 | 単(車返桜) | | |
| 生玉社 | | 多 | |
| 木村堤 | | 多 | |
| 坂町天神 | | 多 | |
| 新清水 | | 有 | |
| 上之宮 | | 有 | |
| 珊瑚寺 | | 有 | |
| 妙寿寺毘沙門堂 | | 有 | |
| 鶴満寺 | | 単 | |
| 寿法寺 | | 単 | |

| | | | |
|-------|----|----|---|
| 造幣局 | | | 多 |
| 住江公園 | | | 多 |
| 水間観音堂 | | | 多 |
| 箕面公園 | | | 多 |
| 日根神社 | | | 有 |
| 合計 | 15 | 15 | 6 |

まず全体として、全ての案内記で紹介されている場所は1つもなかった。また、2つの案内記で取り上げられている場所は7例であった。残りの22例はいずれかの案内記1つでのみの紹介であった。これは全体の約75%にあたり、京都の1つの案内記でのみ紹介された桜名所と同じ割合となった。このことから、京都・大阪を通じて桜の名所の約75%は100年の間に名所としての評価が推移してしまっていることが明らかになった。しかし、大阪の場合も名所の総数が著しく減少しているということはないため、京都と同じく名所がなくなったというわけではなく、名所が移り変わったという方が正しいと考える。また、全ての案内記で紹介されている場所がないことから、京都と違い大阪では古くから定番化された桜の名所はできなかったということがわかる。

次に、近世の案内記である『撰津名所図会』と『浪華の賑ひ』の2冊を比較する。両案内記あわせて23例の名所が紹介されており、共通して取り上げられている例は6例あった。近世大阪の桜名所も京都と同じく、桜の数が多き場所、謂れのある桜がある場所の2種類に分かれた。数の多さを評価している場所は、『撰津名所図会』15例中4例、『浪華の賑ひ』15例中5例と、どちらも大差なかった。それに対して謂れのある単木が評価されている場所は、『撰津名所図会』15例中5例、『浪華の賑ひ』15例中0例と、『撰津名所図会』が差をつける形となった。ここからも、謂れを重視する秋里籬島の名所観が伺える。

近代の『日本案内記』では、6例中1例が単木、4例が桜の数が多きという評価基準であった。単木が評価された1例は、「井保桜」という天然記念物に指定された桜であった。天然記念物という例を除くと、やはり近代において桜名所は数の多さが評価基準として重視されていることがわかる。また、近代においては謂れのある桜は名所としての価値を保てなくなっていることが伺える。

このように、大阪の桜名所においても近世は「数の多さ」と「謂れ」の2つの評価基準があったが、近代になると「数の多さ」が重視されるようになるという京都と同じ傾向が見られた。

ii) 梅

次に大阪の梅名所について見ていく。それぞれの案内記において、梅名所は『撰津名所図会』7例、『浪華の賑ひ』4例、『日本案内記』4例が紹介されていた。3つの案内記をすべて合わせると、梅名所は13例あった。それらをまとめたのが【表6】である。京都では『日本案内記』の梅名所が近世の案内記に比べて極めて少なくなっていたが、大阪では大差ない結果となった。

【表6】 大阪の案内記における梅の記述

| 刊行年 | 1798年 | 1855年 | 1933年 |
|----------|--------|--------|-------|
| 場所 | 摂津名所図会 | 浪華の賑ひ | 日本案内記 |
| 梅薬師 | 多 | 多 | |
| 竹林寺(香之梅) | 単(香之梅) | 単(香の梅) | |
| 広教寺 | 有 | | |
| 北野天満宮 | 謂 | | |
| 鶯塚 | 謂 | | |
| 梅塚天神 | 謂 | | |
| 安正寺 | 単 | | |
| 梅屋敷 | | 多 | |
| 大日寺 | | 多 | |
| 金熊寺梅溪 | | | 多 |
| 牧岡梅林 | | | 多 |
| 畑の梅林 | | | 多 |
| 砂川の奇勝 | | | 有 |
| 合計 | 7 | 4 | 4 |

まず全体について、京都と同じく全ての案内記で紹介された場所は1例もなかった。1つの案内記でのみ紹介されている場所は11例で、これは京都の梅名所と同じく全体の約85%である。また、近代になると大阪においても梅林という梅の観賞形式が現れた。

次に、近世の案内記である『摂津名所図会』と『浪華の賑ひ』の比較を行う。両案内記をあわせると9例の名所が紹介されており、共通して取り上げられているのは2例であった。『摂津名所図会』では7例中5例が謂れを評価しているのに対し、『浪華の賑ひ』では4例中1例にとどまった。ここでも秋里籬島の謂れを重視する名所観が明確に表れる結果となった。しかし、同じ秋里籬島の案内記であっても、京都の『都名所図会』『拾遺都名所図会』では〇〇梅と名前のついた梅が9例中8例にもものぼったのに対し、大阪の『摂津名所図会』では7例中1例のみだという違いがあった。京都に比べるとその数は圧倒的に少ないため、大阪には名前の付いた梅がほとんど存在しなかったと考えられる。

梅の数を評価している名所は、『摂津名所図会』では7例中1例、『浪華の賑ひ』では4例中3例であった。『摂津名所図会』では非常に少ないのに対し、『浪華の賑ひ』では過半数を占めるといふ対極的な結果となった。

両案内記に共通して、梅の数が多き場所と謂れのある梅どちらも取り上げられていることから、近世の大阪において「数の多さ」と「謂れ」はどちらも名所の評価基準として成り立っていたことがわかる。

では、近代の大阪ではどのような場所が梅の名所とされていたのであろうか。『日本案内記』で取り上げられている梅名所は4例であり、そのうち3例は数の多さを評価したものであった。残りの1例も梅が有るといふ記述であり、単木を評価したものではなかった。このことから、近代大阪では梅においても「数の多さ」が重要視されるようになり、謂れのある梅は紹介されなくなっていることがわかる。

以上のことから、大阪の梅名所においても近世では「数の多さ」と「謂れ」どちらも評価さ

れているのに対し、近代では「数の多さのみが評価されるようになったという、京都の梅名所と同じような変化が起きていると言える。

iii) 桃

最後に、大阪の桃名所について見ていく。それぞれの案内記における桃名所は、『撰津名所図会』1例、『浪華の賑ひ』2例、『日本案内記』1例であった。3つの案内記をすべて合わせても、桃の名所は3例のみであった。それらをまとめたのが【表7】である。

【表7】 大阪の案内記における桃の記述

| 刊行年 | 1798年 | 1855年 | 1933年 |
|---------|--------|-------|-------|
| 場所 | 撰津名所図会 | 浪華の賑ひ | 日本案内記 |
| 庚申塚(桃谷) | 多 | 多 | |
| 産湯清水 | | 多 | |
| 久米田桃林 | | | 多 |
| 合計 | 1 | 2 | 1 |

大阪においても桃の名所は少ないことがわかる。また、評価基準においても京都の桃名所と同じく、そのどれもが「数の多さ」を評価されてのものであった。2つの案内記で紹介されている「庚申塚(桃谷)」は、京都の伏見桃山と同じく、桃谷として現在もその地名が残っている。

第5章 花名所の評価の時代変化

(1) 桜、梅、桃の名所の特徴

まず、桜の名所の特徴として、近世では「数の多さ」と「謂れ」の両方が評価されていたのに対し、近代では「数の多さ」が重要視されるようになったということがある。近世の人々の桜に対する接し方として、桜の多さを評価されていた「仁和寺」の記述を見る。『京城勝覧』では、「毎年花のさかり十餘日の間は見る人多くして日々群集せり酒食をたづさへ幕をはりて遊宴をなす者多し高塔あり花をめでん人は花の始中終三度ゆきて見るべし。」との記述が、『都名所図会』では、「花の盛には都鄙の貴賤春の錦を争ひ、幕引はへ、虞松が酒にふし、李白が恨は長縄を以て西飛の白日を繋ぐ事を得んとは、春色の風客花にめで、日ををしむと同じ論なり。」との記述がなされている。これらの記述から、「仁和寺」では春になると桜の下に多くの人が集い、酒を飲み、桜の美しさを愛でながら宴会を開いており、数の多さを評価された桜名所と宴会を伴う花見が密接な関係にあるということがわかる。白幡(2015, p.128)は、江戸の花見を検討し、1600年代の半ばまでは、それ以前の花見と同じで、一本の桜、名のある桜が、主として花見の対象となっていたが、天和年間(1680年代)に入り、群桜の下でのにぎやかな花見が上野から普及していったとしている。京都においても『京城勝覧』の記された1700年頃までには群桜の下での花見が行われている。桜の下で宴会を楽しむ花見が庶民へ浸透したことが、「謂れ」から「数の多さ」への評価の移行が進んだ背景の一つと考えられる。

次に梅の名所の特徴として、桜の名所と同じく近世では「数の多さ」と「謂れ」の両方が評

価されていたのに対し、近代では「数の多さ」が重視されるようになったことがあげられる。しかし、同じく数の多さが評価されている名所でも、桜と梅では性質が異なる部分がある。桜は、数の多さが評価された名所であってもそこにあるのは観賞用に植えられた桜であるのに対して、梅は、商品作物として大量に梅を植えた結果、その景色を評価されて名所となっている場所がある。このように、同じ数の多さを評価された名所であっても、桜と梅ではその性格が微妙に異なっていると言える。また、名所としてあげられる梅は、桜や桃に比べて〇〇梅のように名前がついた単木が多いというのも特徴である。これは、日本において梅が元々は食用ではなく花を愛でるための樹木として扱われていたことが理由であると考えられる。小林（1990）によると、梅は『万葉集』で登場した植物のなかでハギに次いで2位の119首が紹介されており、その全てが花を賞したもので果実の利用を対象としたものではなかった。「梅の木を庭に植え、その花をめでることが、奈良時代には流行していたとみられる」（有岡，2016, p.13）のである。このことから、万葉の時代には梅は完全に食用ではなく、花を愛でるためのものであったことがわかる。この、梅は花を愛でるためのものであるという価値観と、梅を題材にした和歌が多かったことが、桜や桃と違い単木として評価される梅が多かった理由ではないだろうか。

最後に桃の名所の特徴として、京都大阪であげられた桃名所は全てその「数の多さ」を評価されてのものであることがあげられる。これは、桃が商品作物として栽培される樹木であったことが一番の原因であると考えられる。梅も同じく商品作物として栽培されることがあるが、梅は単木であっても評価をされている。この違いは、梅と桃がそれぞれ日本に伝わってきた時の日本での位置づけが異なったことが原因であると考えられる。前述の通り、梅は元々観賞用の樹木であった。「鎌倉時代（1192～1333）以来のウメに関する文献では、花が主であり果実は副であるが、室町時代（1392～1573）の社会相を描いた『尺素往来』（1487）には、菓子の種類として青梅、黄梅の二つが載っている。」（小林，1990, p.123）とあるように、日本において梅が食用として人々に認識され始めたのは室町時代あたりからである。それに対して桃は、「桃が水田稲作文化セットの一つとして渡来してきたのは、その花の美しさを愛でるためのものではなく、最大の役割は稲作が不作となった時の食料を補完するためであった」（有岡，2016, p.293）とあるように、古くから観賞用ではなく非常食や薬として利用するために栽培されてきた樹木である。この観賞用の樹木として取り扱われてきたか否かの違いから、梅は単木であっても愛でられ、桃は単木で評価されることがないという差が生まれたと考える。

(2) 京都と大阪の花名所

ここまで、京都の花名所と大阪の花名所をそれぞれ樹木の種類ごとに見てきた。そこから、京都と大阪は桜、梅、桃、いずれの花名所も同じような時代による変化がみられることがわかった。ここにおける時代による変化とは、花名所そのものの質が変わったという訳ではなく、人々の花の見方、花名所の評価基準が変化したということである。また、京都と大阪ともに花名所の大部分は時代とともに取り上げられる場所が移り変わっていることも明らかになった。評価基準の変化による移り変わりもあると考えられるが、近世でも数の多さが評価されていた場所が近代の花名所には含まれないものも少なくない。花が多い状態を維持することが難しく、質が変化している面もあると考えられる。

大きく見ると同じような変化を遂げてきた京都と大阪の花名所ではあるが、細かい点での違いは見られた。一番は、〇〇梅のように単独で名前のついた花の紹介数である。名前の付いた花を多く取り上げてきた秋里籬島の案内記でその紹介数の比較をおこなう。桜、梅、桃全ての項目の中で、名前の付いた花は京都の『都名所図会』『拾遺都名所図会』で43例中23例(53.5%)、大阪の『摂津名所図会』で23例中6例(26.1%)であった。前述の通り秋里籬島は、謂れのある花に関心を持って、それらを非常に積極的に取り上げてきた人物である。1793年に刊行した『都花月名所』は、その集大成とも言えるであろう。そんな秋里籬島においても、その割合を見ると大阪では京都の半分ほどの紹介数しかなかった。これには、京都の歴史性が反映していると考えられる。

近世から近代にかけて京都と大阪の花名所は同じような道をたどっているが、一方で謂れのある花が多く取り上げられるという京都の特異性が伺える結果となった。

第6章 まとめ

ここまで、京都と大阪の案内記における花の記述を近世、近代に分けて見てきた。それによって、近世においては花名所に対して多様な見方があったということも明らかとなった。江戸時代の人々は、かつてそこで詠まれた和歌や、その花にまつわる言い伝えから過去の情景を思い浮かべ、その場所に名所性を見出していた。近世は、そのような「謂れ」ある場所、つまり2章でふれた「過去名所」と、現在と同じく「数の多さ」、多量の花が咲く景色を愛である「現在名所」が共存した時代であったと言える。その後時代が進むにつれ、過去名所は案内記から姿を消し、近代の案内記では主に花の数が多い現在名所が紹介されるようになった。これにより、近世と近代それぞれにおける花名所の名所観の違いが明らかになった。

梅は『万葉集』の時期から花を愛でるために用いられ、一方で桃は観賞用ではなく非常食や薬として利用するために栽培されてきたといった花木の栽培や観賞の経過をあわせて考えると、みるべき花(花名所)の評価は、

- ①単木の謂れのある「過去名所」の梅
 - ↓
 - ②単木の謂れのある「過去名所」の桜／③数の多い「過去名所」の桜
 - ↓
 - ④数の多い「現在名所」の桜
 - ↓
 - ⑤数の多い「現在名所」の梅や桃
- と移ろってきたと言えるのではないか。

秋里籬島が主に①、②、③を評価し、貝原益軒や暁鐘成は④、⑤を主に評価していたことから、近世はこのような評価が混在し、人による評価軸の違いもみられたと考えられる。近代になると、①、②、③に対する評価は薄れ、④、⑤への評価に移行している。

また、名所として取り上げられている場所の移り変わりとして、京都と大阪共に桜は約75%、梅は約85%の場所が1つの案内記でしか取り上げられていなかった。つまり、花名所の大部分は非常に流動的なものである。近代になり謂れのある「過去名所」としての評価の視点がなくなることで、ますます場所の流動性は強まったと考えられる。

以上のことから花の名所は、物理的にも、人々が花を見る視線的にも移り変わっていくものであると言える。現在花の名所として取り上げられている場所も、将来にわたって評価され続けるとは限らない。花は物理的に移ろうものであり、また、花の見られ方も移ろうものである。

今回は京都と大阪をとりあげて考察し、京都と大阪で同じような傾向がみられたが、第2章でみたように近世の名所観が異なっていた江戸・東京においては、また違った花名所の変化がみられるかもしれない。今後の検討課題としたい。

【注】

- 1) 『都名所図会』は、滝沢馬琴の遺稿とされる「異聞雑稿」(国書刊行会編, 1909, p.65)によれば、発刊の翌年には年間4,000部を製本したという。一連の京都の案内記の中での「最大のベストセラー」(川嶋, 1999, p.76)だったという。『京城勝覧』は、金(2010)によれば、享保3年(1718)より前に初版が発刊され、文化12年(1815)印刷版まで5つの版があったと整理され、小冊子でモデルコースを案内するタイプの案内記としては、最も版数を重ね、流布したと考えられる
- 2) 第2章(2)以降の検討では、1780年板ではなく、国際日本文化研究センター所蔵の1786年再板本を参照している
- 3) 『撰津名所図会』のうち、大阪市内部分にあたるものが1巻から6巻である
- 4) 『京城勝覧』と同時期の案内記として、2章でふれた『撰陽群談』(蘆田編, 1971)があるが、名木の記載はあるものの、寺社の紹介の部分に花の記載はみられず、『撰津名所図会』との比較が困難であった

【引用文献】

- 蘆田伊人編(1971):「撰陽群談」『大日本地誌大系38』. 雄山閣
- 秋里籬島(1798):「撰津名所図会」. 角川春樹(1980)『日本名所風俗図会 10大阪の巻』. 角川書店, p.5-256
- 有岡利幸(2016):『花と樹木と日本人』. 八坂書房
- 池田東籬・貝原益軒(1996):慶応再刻京都順覧記・京城勝覧. 『近世風俗・地誌叢書 第3巻』. 竜溪書舎
- 岩佐淳一(2001):旅行とメディア—戦前期旅行ガイドブックのまなざし—. 学習院女子大学紀要, 3, 11-27
- 上杉和央(2004):17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観. 地理学評論, 77-9, 569-608
- 小野佐和子(1991):江戸時代の都市と行楽, 博士論文
- 川嶋将生(1999):『「洛中洛外」の社会史』. 思文閣出版
- 金廷恩(2010):近世案内記における観光モデルコースの登場:貝原益軒著『京城勝覧』からみえるもの. 日本研究, 41, 73-102
- 京都府総合資料館(2006):江戸時代の京都案内記. 京都府総合資料館だより No.143
- 郡千寿子(2007):弘前市立図書館蔵『都名所花月名所』考—近世期の京都観—. 往来物の研究, 3, 1-28
- 国書刊行会編(1909):『続燕石十種. 第2』. 国書刊行会

- 鶏鳴舎暁晴(1855)：「浪華の賑ひ」．角川春樹(1980)『日本名所風俗図会 10大阪の巻』．
角川書店，p.369-411
- 小林章(1990)：「文化と果実—果樹園芸の源流を探る—」．養賢堂
- 白幡洋三郎(2015)：『花見と桜』．八坂書房
- 新修京都叢書刊行会編(1967)：「京童．京童跡追．京雀．京雀跡追」．『新修京都叢書第1巻』．
臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1967)：「京羽二重．京羽二重．京羽二重織留．新益京羽二重織留大
全」．『新修京都叢書第2巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1968)：「名所都鳥．堀川の水．京内まいり．都名所車．都花月名所．
洛陽十二社靈驗記」．『新修京都叢書第5巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1968)：「雍州府志」．『新修京都叢書第10巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1974)：「京師巡覧集．洛陽名所集．出来齋京土産」．『新修京都叢書
第11巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1971)：「近畿歴覽記．菟藝泥赴．京城勝覽」．『新修京都叢書第12巻』．
臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1968)：「山城名勝志 乾」．『新修京都叢書第13巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1968)：「山城名勝志 坤」．『新修京都叢書第14巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1969)：「山州名跡志」．『新修京都叢書第15巻』．臨川書店
- 新修京都叢書刊行会編(1972)：「扶桑京華志．山城名跡巡行志．山城名所寺社物語」．『新修
京都叢書第22巻』．臨川書店
- 鉄道省(1932)：「日本案内記．近畿篇 上」．鉄道省
- 鉄道省(1933)：「日本案内記．近畿篇 下」．鉄道省
- 長谷川奨悟(2012)：近世上方における名所と風景—秋里籬島編『都名所図会』・『摂津名所図
会』を中心に—．人文地理，64-1，19-40
- 溝口周道(2001)：近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文の特徴．ランドスケープ研
究，65-5，371-374
- 山本光正(2010)：旅行案内書の成立と展開．国立歴史民俗博物館研究報告，155，109-136
- 秋里籬島(1786)：「都名所図会」．国際日本文化研究センター，都名所図会データベース
<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyoto/c-pg1.html>
- 秋里籬島(1787)：「拾遺都名所図会」．国際日本文化研究センター，拾遺都名所図会データ
ベース
<https://www.nichibun.ac.jp/meisyoze/kyotosyui/c-pg2.html>
- 肥田皓三(2018)：広く豊かな教養をもとに、幕末大坂で縦横無尽の活躍．U-CoRo プロジェ
クト・ワーキング(2018)「今昔タイムズ号外 暁鐘成のしおり」．大阪ガスエネルギー・
文化研究所，p.1
<https://www.og-cel.jp/project/ucoro/pdf/2018timesVol10.pdf>
- 日本交通公社(2019)：「旅行年報2019」
https://www.jtb.or.jp/wp-content/uploads/2019/10/nenpo2019_1-4.pdf
- 日本交通公社(2021)：「旅行年報2021」
https://www.jtb.or.jp/book/wp-content/uploads/sites/4/2021/11/nenpo2021_1-4.pdf